

砂時計

2008(平成20)年5月4日鑑賞<TOHO シネマズなんば>

★★



監督・脚本＝佐藤信介／原作＝芦原妃名子『砂時計』（小学館刊）／出演＝松下奈緒／夏帆／井坂俊哉／池松壮亮／塚田健太／伴杏里／岡本杏理／戸田菜穂／高杉瑞穂／風間トオル／藤村志保（東宝配給／2008年日本映画／121分）

……映画館の中は若い女の子同士の観客でいっぱい！ 彼女たちは原作やテレビドラマの達人らしい批評を次々と……。松下奈緒の大ブレイクを！ 私のそんな期待はまたも持ち越したが、その原因は……？ やはり、おじさんにはこんな映画は向かないのかも……？



たまには映画館で観客のリサーチも……

『砂時計』は何度も試写のチャンスがあったが、本来の弁護士業務と重なったため鑑賞できていなかった作品。しかし、今年のゴールデンウィークは仕事づけとなったため、TOHO シネマズなんばでチケットを買って観ることに。

朝1番にチケットを買い、フィットネスクラブでの運動終了後、3時40分からの上映で観たが、館内はいっぱい。そのほとんどは若い女の子。もちろんアベックもいるが、女の子同士の2人組、3人組、4人組が目立っていた。私はオッサン1人で観たのだが、両隣とも若い女の子の2人連れ。彼女たちは映画が終了し字幕が流れ始めると、たちまち原作と比べてどうのこうのとおしゃべりの花が。その話を聞いていると結構面白かったから、やはりこんな映画は劇場で観なければ観客の反応がリサーチできないと痛感！



松下奈緒の大ブレイクはいつ……？

私は女優松下奈緒もピアニスト松下奈緒も大好きだが、『アジアタムブルー』（06年）を観ても、『未来予想図～ア・イ・シ・テ・ルのサイン～』（07年）を観ても、彼女の魅力全開で大ブレイクといかないのが残念。それは、この『砂時計』でも同じ。

そのうえ、ヒロイン水瀬杏^{あん}の中高生時代を夏帆が、大人時代を松下奈緒が演じるのだが、物語のウエイトは中高生時代に置かれているから、主役はどちらかと言うと、松下奈緒よりも夏帆の方……？

もっとも、この映画の松下奈緒の演技について佐藤信介監督は、韓国の天才監督キム・ギドクばりの演出をしている……？ つまり、映画後半は彼女のセリフを極力抑え、顔の表情だけで演技をさせたため、存在感はそれなりのもの。しかし残念ながら、またしても女優松下奈緒の大ブレイクは持ち越しに……？ さて、その原因は……？

基本ストーリーは？

この映画の基本ストーリーは、中学生から高校生へと進んでいく中で芽生えてくる初恋と別れ、そして遠距離恋愛(?)を描くもの。その主人公が杏(夏帆)と北村大悟(池松壮亮)の2人。杏は、父親正弘(風間トオル)が事業に失敗したため離婚した母親美和子(戸田菜穂)と共に東京から島根の実家に戻ってきた中学生。そんな彼女を温かく迎えた地元の中学生在が大悟だ。他方、この2人に微妙に絡んでくるのが、同級生の月島藤(塚田健太)とその妹の椎香^{しいか}(岡本杏理)。

芦原妃名子の原作は全10巻もある大作で、700万部も売れたらしいが、そのファンのお大半は女子中高生と若者たち……？ 杏に自分の姿を投影させながら読んでいくことができる等身大のストーリーが、この原作の魅力ということだ。ちなみに、浜田光夫と吉永小百合のコンビ、山内賢と和泉雅子のコンビ、倉石功と姿美千子のコンビによるさまざまな純愛映画を私は中高生の時代にたくさん観たが、『砂時計』はいわばその現代版……？ したがって、その年齢の中高生や若者たちがこの映画に興味を示すのは当然。

10年後の2人は？

ストーリーが大きく飛躍するのは、杏が大悟に別れを告げた10年後。今は婚約者佐倉圭一郎(高杉瑞穂)と東京で幸せな生活を送っている杏(松下奈緒)が、同窓会でわざわざ島根まで帰ってくるという設定はいかにも安易だが、そこで少女時代の恋人大悟(井坂俊哉)と再会した時、さて2人の間に何が生まれてくるの……？

砂時計を小道具とした2人のやりとりに注目だ。

私の採点は？ 『キネ旬』の採点は？

『砂時計』についての私の採点は星2つと厳しい。それは杏の母親美和子の自殺というトラウマを引きずる杏が、自殺を図るというストーリーになじめないため。つまり、どうしても私は、杏の祖母植草美佐代（藤村志保）が言うように「しっかりせえ！」という気持が強く、杏の気持に同化できないわけだ。

他方、『キネ旬報』5月下旬号「REVIEW 2008 Part 1」では4人の評論家が『砂時計』の評論と採点をしているが、その採点も1+2+3+1=7点とかなり低い。またその評論もかなりの酷評。短い字数ながらここまではっきり自分の意見を書けるのはさすが一流の映画評論家だが、その視点の鋭さもなかなかのもの。

もっとも、この採点と評価には佐藤信介監督以下、スタッフや俳優陣たちは納得できないはずだ。しかしその隣りにあった、ドイツ人のローランド・エメリッヒ監督の大作『紀元前1万年』（08年）は1+2+1+2=6点と、『砂時計』より低かったから、それがせめてもの慰め……？

あの巨大な砂時計の採算は……？

今大阪府は橋下知事の大ナタによる1100億円の歳出削減が大テーマ。しかして、この映画の最初と最後に登場する巨大な砂時計の採算は……？ これは仁摩サンドミュージアムにあるもので、1トンの砂を1年かけて落とす世界最大の砂時計らしい。鳥根県はかつての総理竹下登氏のお膝元。そして彼の提唱によって各自治体に1億円のおふるさと創生基金をバラまいたのは1988年のこと。

仁摩サンドミュージアムがいつ、どんな予算編成によって計画、建設されたのか知らないが、入館料は高校生以上は700円、小・中学生は350円とのこと。すると、きっとその採算は合わず、入館料だけでは維持費にも足りないのでは？ そんな現実を直視すれば、鳥根県も大阪府と同じように、県の財政赤字問題したがって仁摩サンドミュージアムの赤字問題に真剣に取り組まなければならないのでは……？

鳥根ブランドを売込まなくては……

私は鳥根県は小学生時代に出雲大社に行ったことがあるだけだが、この映画における鳥根ロケは見どころがいっぱい。前述の仁摩サンドミュージアムは是非1度行って

みたいし、杏が自殺未遂をすることになる石見海浜公園にも是非行ってみたいもの。もっとも、杏の実家がある大代町飯谷は山林原野の自然いっぱいの地域だから行く機会はないだろうが、スクリーン上で観る限り美しく、雰囲気の良い村。その他、この映画のパンフレットにある島根ロケガイドは見どころがいっぱいだ。

今や「フィルムコミッション」は各地の大きな力となっており、『UDON』(06年)や『眉山』(07年)などのご当地映画は一定の興行収入をあげているはず。その意味では、島根県もフィルムコミッションに力を入れ、この映画で島根ブランドを売り込まなくては……。

ポイントは？ 大展開は？ 結末は？

この映画前半のポイントは、母親の自殺を知らせに来た村人たちのシーン。ことのほか恐怖心をそそるように表現されたこのシーンが、杏の心の傷としていつまでも残ったことは明らかだ。そしてそれが、後半のポイントとなる砂浜での杏の自殺シーンに結びつくことに。

杏の自殺の動機は、同窓会から東京に戻った杏の様子がおかしいことに気づいた佐倉が砂時計について詰問したり、母親の自殺を伝えていなかったことを非難した挙げ句、杏の目の前で婚姻届を破り捨ててしまったことへの絶望感。さて、そんな大展開についてのあなたの賛否は……？ また、恋愛映画の注目点は何といってもハッピーエンドかどうかを中心とした結末だが、さて『砂時計』の結末は……？

2008(平成20)年5月6日記